緑園国際交流トークサロン　　No.144

不思議に満ち満ちた島国　マダガスカル

2019年7月27日　13:30～15:30

台風が接近する中、幸い横浜は好天に恵まれ無事開催された。今回は、横浜国立大学の留学生で日本語と経営を勉強している、ちょっと長い名前のランドリアニファハナ・マイケル・デラ・ヘリラントさんをスピーカーとして招いた。ホームステイ受入れ先のご家族や留学生仲間の方も参加され、とても賑やかな会になった。ご本人は、大学の宿題やトークサロンの準備のためかなり寝不足とのことだったが、明るい笑顔とユーモアを交えたトークで盛り上がった。

マダガスカル共和国は、アフリカ大陸の南東海岸部から約400kmの西インド洋に浮かぶ、日本の国土の約1.6倍、世界で４番目に大きい島(約587千㎢)および周辺の島々からなる島国である。総人口は約25百万人で、首都は島のほぼ中央に位置するアンタナナリボ(人口約 1.4 百万人)、以前は６つの州に分かれていたが、現在では22の地域・行政単位で構成されている。通貨単位はアリアリ(ariary)で、1000アリアリ≒35.5円程度。

産業別では、農業が 26%、繊維・水産・木材・鉱山業が 16%、サービス業（旅行・通信など）58%となっている。輸出産品は、米・キャッサバ(タロイモ)・トウモロコシ・バニラ・砂糖・コーヒーなど、輸出相手国はフランス、米国、中国の順に取引額が多く日本も5位に入っている。輸入相手国は中国、インド、フランスの順であるが、日本は 20 位にも入ってこない。中国の輸出入における影響は特に大きくなっている。信仰面では、キリスト教徒が最も多く少数ながらイスラム教徒や土着の宗派も存在する。特に先祖を敬う考え方から、埋葬した遺体を 3～4 年毎に新しい布で包み直す独特の習慣が見られる地域もある。使用言語は、マラガシー(Malagasy)＝マダガスカル語が方言はあるものの広く普及しており、歴史的背景や国際的コミュニケーションのためにフランス語も浸透している。

最初の定住者は、学術的研究により、2000年ほど前にインド洋を横断してきたインドネシア系の住民であることが確実と言われており、その後モザンビーク海峡を渡った東アフリカのバンツー系の住民との交雑などにより、最大のメリナ族を始め18の種族を中心に構成されている。8世紀頃にはアラブの商人が島の北部海岸で交易を行ない、15世紀頃には最初のヨーロッパ人として、ポルトガル人がインド航路の途中で偶然島を発見した。19世紀の帝国主義の時代には、フランスが侵攻し1896年に全土を制圧し植民地化したが、2度の反フランス闘争を経て、1960年に正式に独立国家となった。

マダガスカル島は、大陸移動により他の大陸から孤立した期間が長いため、生物多様性の宝庫であり80%～90%が固有種と言われている。バオバブ(baobabs, 通称bottle tree)の木や、ラビナラ(ravinala, 通称traveller’s tree)は、その特徴もあり国章その他の機関でロゴのデザインに使用されている。また、キツネザル・ロリスなどの原猿類、多種のカメレオン、世界で最も美しいと言われる陸ガメなど、多種多様な動物も生息している。気候は大まかに乾燥・半砂漠・湿潤・準湿潤の４つの区域に分かれ、中央部の山岳地帯の最高峰の山は高さ2,876mである。

日常生活では、米(白米・赤米=red rice)を主食として、豆・キャッサバ・葉物野菜や牛肉や小エビも食されている。スナックとしては、米ベースの甘辛いおやつ・フライドバナナや、インド・中国・ベトナムから影響を受けた揚げ物や肉の串刺しもある。また、椰子の葉の繊維で編んだ籠や帽子、木彫り、刺繍などの伝統的な工芸品も存在する。

マダガスカルは、汚職・腐敗、低位な識字率、農業・鉱山業に依存した産業、インフラの未整備、海外援助への依存、貧困の問題を抱える一方、宝石・ニッケル・コバルトの豊富な鉱物資源、世界一の生産量を誇るバニラなどの将来性のある農業、観光開発への期待、若年層が多いという利点があり、教育の充実が国を変えるポイントであると考えられる。

トークとともに、マダガスカル語の天気予報ビデオやプロモーションビデオが紹介され、トーク後は、国名・国旗の由来、付加価値税の有無、病院施設の状況などの質疑応答があった。日本からは距離が遠く、ヨーロッパ各国からに比べて日本人観光客も非常に少ないが、是非訪れてみたい「不思議に満ち満ちた島国」であった。マイケルさんを囲み参加者の集合写真を撮って閉会した。

ありがとうございました。

文責：桑山賢治（RCA 国際交流委員会）